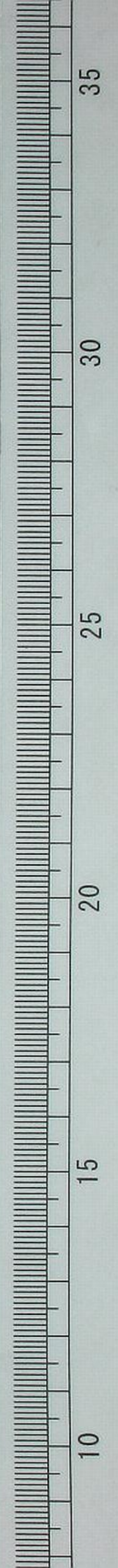


嚴君年譜

津田文庫  
文庫 1  
1834





石齋年譜

文化十四年丁丑

正月五日尾張國名古屋廣井下花車町私邸ニ生時父勇  
年久通年四十一母戸田氏 銘二十九〇通稱幸次郎諱光業  
文政二年己卯三歳

或日神祇園社内下花車町ニ遊遊ニ社頭掲掲クル所、天王、二字ヲ見傳  
女ノ背ニ指頭ヲ以テ換換盡ス婢歸テ其狀ヲ告テ父之ヲ聞キ高ト  
ニ臨帖臨帖ヲ照照、換換盡スルニ一ニ誤ラス  
同六年癸未七歳

又圓頓寺中精舎存存、鬼子母神ニ三遍額額ニテ書シ納ム是ヨリ前子女天  
折折ヲ復復、母鬼子母神ニ祈請祈請、君ヲ癒癒テクヨ母ニ其健康ヲ禱  
ル爰ニ空テ此舉此舉アリ子女生テ七歳ニテ鬼子母神ニ祈リ草履履テ神前ニ其子母人ニミ  
○愛知郡中村鎮所清正公ノ社ニ神号ノ額ヲ書シ納ム

つだ文庫







同八年丁酉 二十二歳

浅井氏ヲ娶ル名ハ東文政三年庚辰ノ生ナリ幼ニシテ母ヲ喪ヒ好シ  
繼母ニ使ハ十五歳時ヨリ君門ニ入り書ヲ學ビ侍ラ母ノ病床ニ  
侍リ看護スルハ頗ル懇甚ナリ母毎ニ其從順ヲ稱シ遂ニ君ヲ  
侍ル

同九年戊戌 二十三歳

横山松三郎ハ父曾平ノ門人ニシテ父歿後君ノ後見タリキ年漬  
鬼迫リ家財ヲ沽却スルニ尚ホ百金ノ不足ヲ告グ故ニ自家ノ株  
本藩ノ同僚ニシテ賣リ一時ノ急ヲ救フ分第ナトシテ君ニ訴フ君之ヲ  
憫ニ家祖傳来ノ鐘倉末國次ノカヲ携ヘ所屋傳三郎  
時行ヨリ父曾平ヲ訪ヒ實ヲ告ケ百金ヲ借シテ君ニ示シ君ノ義氣  
感シ直ニ諾シテ之ヲ救フ君ノ家ニ歸リ之ヲ妻ニシテ僕ニ所屋傳  
意ヲ懐ヒ直ニ之ヲ携ヘ横山ニ赴キシトス妻ハ之ヲ止テ曰教令ヲ殘シ

甚製

所屋傳三郎ハ  
不仕生利ト云  
他ノ初行ハルニ  
云

同十年己亥 二十三歳

家計ヲ補ヒコトヲ請フ又曾平歿後母ノ長病加フニ飢饉尋頻  
年不幸ニ遇ヒ家計ニ最モ苦シユエテナリ君ニテ曰人ノ急ヲ救ヒ  
トスルニ家事ヲ顧ルノ暇アラニヤト其ニテ年々ケナシニ性テ横山ニ思フ  
皆感泣シテ再生ノ恩ヲ謝セリト後横山舉動ヲ見ヒ一家美服  
ヲ備ヘ侍々タリト皆其所為ヲ歎ナリ横山カ君ハ意ニハマ  
志州島兩稻垣彦ノ臣若木十内ト起倒流ノ柔術ヲ以テ名アリ偶々  
名古屋ニ来リ遊ブ所屋傳三郎ト謀リ君ノ道場ニ招聘シ其技ヲ  
學ブ○又祀ノ代ヨリ町方役所執田方役所ノ道場ニ出張シ附屬同  
心ニ教授スルニ當時町方同心ノ中ニ出席ヲ怠リ刺ハ出務スル  
アルナキハ却テ之ヲ朝ハテアララケ聞クニ至リ大ニ之ヲ嘆シ是等ノ迫来  
奉行ノ見分打絶ニタルニ因リ憤リ書ヲ奉行ニ上リ時々見分ヲ  
リテ其勤怠ヲ正シ賞罰ヲ明カニシラレテ請フ○君未シ齡ニ低ク



杖懸ニシテ思て六切ニ書ク伊藤孫六ニ書キ教授ヲ請フ孫六亦  
 世藩ノ士國明流ノ達人ナリ偶々他流ノ者來リ試合ヲ乞フアトキ  
 木ヲ刀一布ヲ携ヘ之ニ應ズルヲ例トシ先ツ對手ノ眉間ニ木ヲカ  
 捕ハ進ニテ應ズ常ルニトナシ對手之ヲ拂ハントスハ過カレテ遠  
 ニテ依リ木ヲカハ角ニ眉間ニ捕ハントキ如キコト數回ニテ對手一歩  
 一歩ト退キ遂ニ壁間ニ達シ避ククワ得又進退ニ控テ降参ス又席上  
 戯トシ輝ヲ捕ガ見ルニ先ツ指頭ヲ以テ席ヲ打テ蠅ノ飛散ニ待テ  
 空中之ヲ捕ヒ一モ復ラズ又天井ニ止ル蠅ヲ木ヲカヲ以テ打落シ  
 又ハ木ノ葉ニ止ル蠅ヲ虫ヲ打ツテ決テ切先ノ天井ニ解ルナク木葉  
 ノ動搖スルヲナシ又人ヲシテ對面ニ木ヲカヲ真向ヨリ打下ニ鼻  
 頭ニ達セシトシテ解シノスト斯ノ如クナレテ敵ニ達スル距離ニ至ラサレハ  
 狼リシカヲ打下スニカラストナリ其技凡ナラサレ知ルヘシ君毎云  
 フ伊藤先生歿スレト云明流ニ斷絶スレト宣ナルカナ

（甚製）

同十一年庚子 二十四歲

父常平歿後不幸累ナリ家計頗ル困難ニシテ旧債ヲ償フ得ズ遂ニ  
 二月接斷方役所ニ願家屋上ニテ抵當トシ官舎若干ヲ借用シ一時  
 名忘ラ凌クノ妹春女ヲ破屋内ニ三郎ニ寄托スル奉藩ノ先職石  
 河佐治守ノ臣杉山白菊ニ就テ書ヲ學ブ白菊常ニ左傳ヲ至反  
 讀リ座右ヲ雜マヌ書ハ柳公權ヲ學ビ其神髓ヲ得タリト君梅ヲ曰  
 一書ハ子昂ニ出ク君ハ子昂ノ人トナリト其書風ノ軟弱ナルヲ好ス  
 爰ニ於テ白菊ノ書ヲ學ブ至レリ白菊後故アリテ屠腹ニテ死ス  
 君大ニ之ヲ悲ム○女子ヲ學ブ柳ト稱ス月日  
 同十三年 壬寅 二十六歲

女子ヲ學ブ鈴ト稱ス○君是歲ニ腰痛病ニ罹リ病間作外ニ僅紙筆ヲ  
 弘化元年甲辰 二十六歲



君性多病腹痛ニ悩ムト屢ナリ病弱、身武技ヲ以テ為ス能ハカ  
ク變リテ意ヲ専ラ藩墨ニ注グ而ノ思ヘリ、禪理ヲ應用シテ病苦ヲ  
忘ル、ニ如カストシ一室ニ坐シ居テ食事、他ハ概リシ人ヲシテ入ラシム  
書ニ耽、身ヲ委テ病トシテ分離スルニカシテ遂ニ病苦ヲ感セザルニ至  
リト此間最モ家計ノ苦、破屋傳三部君、筆紙墨瓦ニ飯米、  
賄リ之ヲ助ク

同二年乙巳二十九歳

或日破屋傳三部来リ君ノ樽在座トテ龍居スルヲ見病者君モ  
然ハヘカラストナシ強テ誘ヒ藝田ノ妓播、登ル即間ヲシテ興ヲ添、  
頗ハ款、其、カメヲの宮日ナリ皆寢ニ就ク君ハ静マニ待テ様  
丁ヲ欺テ宿ニ眠レラ家ニ歸ル後之ヲ詰ル、答曰後来志ヲ立テシ  
トニ者一夕、快ヲ食リ不幸ニシテ徽毒ニ感得ストテ終生廢物トナ  
リ後悔ルニ其症ナカルヘシト皆其志ヲ奪フヘカラサルヲ稱ヤリ〇八月

其製

六日子中刻女子ヲ擧ク菊ヲ稱ス

同三年丙午三十歳

二月家族ヲ以テ青山富三部ニ托シ江戸ニ遊ブ君、杉山白華ヲ  
表ラヤ大ニ落膝シ他ハ僕、語ルモノナシ志ヲ立ルハ大都ニ出ル、如カスト  
遂ニ意ヲ決シ此擧アリ江戸ニ達スルハ先ノ半込馬場下町石河  
佐渡守郎大脇通助ヲ訪ヒ寄食ス此間屢ハ椿山ヲ訪ヒ畫事  
ヲ問フ大脇氏ノ晷ニ江戸在都トナリ名古屋ヲ畫スル際破屋  
傳三部ヲ訪ヒ別ヲ告ク徂然君ヲ来ル此時既ニ江戸ニ出ル志アリ  
テ此ラ之ヲ氏ニ語ル氏其ニ聞キ先生ハ之ニ出ルハ先ニ年ヲ宅  
扱シ符々計畫セラレシコトヲ報告セリ君其志ヲ謝シ遂ニ其約  
随ヒシナリ未ダ教日ナラレテ君ヲ遇スルコト頗ハ冷淡シテ前々ニ及セリ  
君之ヲ快シトセズ遂ニ去ラ小田向竹島の某カキ表ニ書ク山科園上書方ニ  
轉ス園書ニ元京師ノ侍ヲ和歌ヲ好ム後ナラストテ後去テ西

園書ニ書ク表ニ書ク  
一役ヲ使フ所  
ヲ示シ所ニ所  
子ニ示シ所



兼秀三十三後  
相任にありたり

國橋の二丁目時経師仙を即ち寓食の仙を即ち名ユミテ書  
時名アリ君ヲ道スルコト厚シ○或日横山三丁目書肆和泉屋  
勘吉赤門の店頭に至り書スル所細楷ヲ示し板下ヲ書セシテ  
諸フ子代原藏問テ曰フ君ハ細楷ノ以人カト君情出シシ  
答曰莫リ侍奉ノ糖和ヲ嗜シテ砥柱ヲ耕ラ去ル原藏君  
ノ凡テラハトク費リ次日来リ前日ノ遺ヲ謝スモシヨリ厚ク教ヘ  
板下ヲ專テ書セシム

同四年丁未三十一歳

江戸に在ルコト殆ト一斗都下ノ情況ヲ異ホ知テ得シヨリテ  
月郷土名古屋ノ帰リ家族ニ移住ノユトク告ケ家屋敷及ニ家具  
ヲ賣却シ及債ヲ償ヒ家藝ハ門人青山省三郎ニ相傳セシ  
居トナリ家族ヲ率ヒ江戸ニ移住ス以際親戚朋友君ヲ諫テ曰君  
如ク多病ノ身及テ親戚朋友マモキ百里外ノ池郷ニ移ルハ

八世

ルハカフスト君之ニ居ラ曰名ヲ為スマテカシト想テ郷土ヲ履ス若シ  
成ラズハ倒レテ止シト断坐辭シテ途ニ上ル夫時伴ヲモハ母  
妻ト籠菊ニ女ヲ姉春モ亦郡屋ヲ辭シ後至ル横山松三郎  
ト長女久江氏出シコトヲ望ム故ニ之ヲモト行行ス此行旅行ニ慣ル  
モノニテ加フル婦女子多シ故ニ山田忠治ヲ若クテ常領トシテ同  
行ヲ依頼ス忠治ハ藩用ヲ以テ屢々往來シ行旅ニ経験アリテナリ  
ナリ是ヨリ前時経師仙を即ち君ノ為ニ本所小泉町四の宮大工 和泉屋前住 原藏何ニカト  
家屋ヲ賃借シ雜具ヲ備ヘ君ヲ待テ又和泉屋ノ原藏何ニカト  
長谷川某在門等呂川驛ニ出テ迎テ第久治ハ本藩ノ小吏ナリ  
江戸に在勤シ藩屋ノ田舎者ニ赴クニ随從ニ供待降ニ階墜落  
為リ及傷シ藩屋中ニ在リ君ヲ迎フルコトヲ得ス○君移住後傳  
書ヲ以テ家族教ヨク養ム其業ヲ執ルヤ成刻ヲ限リ其期過ル



白申ノ身トナリトテ専ラ唐字ノ墨帳ヲ臨ミ畫圖穢ヤシ手腕ヲ洗  
濯ストテ一ハノ若ヲ自ラ魁○家主半兵衛ハ好ク君ヲ遇ス悴ナリテ  
君ノ書ヲ抄惜カク教年ナラステ又ニニ女三氣帝ノ該家ニ至リ  
遊フ○妹春時繪師仙ト部ト務ス

嘉永二年己酉三十三歳

二月十日男ヲ擧ル秀三郎ト稱ス○本所松坂町守屋敷ノ小吏伴  
淳平藏君ノ書風ヲ慕ヒ入門シ専ラ細楷ヲ學ブ又君武技ヲ  
嗜ムヲ知リ筆墨ヲ餘暇教授ヲ請フ君最モ好ク所恆テ之ニ應  
シ幸ヒ書ニ空クアルヲ出テ教授ス

同三年庚戌三十四歳

越前勝山小笠原氏ノ臣依々木後林ト恒助来リ入門シ氏ハ最  
書ヲ好ミ勇テ板下ヲ書セトテ良師ヲ尋ヌルノ際四谷傳馬町  
ニ在ル板本師ト就テ其人ヲ問フ渡邊深藏ノ書ヲ出シテ深藏

其製

板下書キテテ都下ニ名アリト又主人ノ度側ト見筆者同ト  
ニ是レ則チ君ノ書ヲ其書意ニ協シ本所ノ住人用キ其ノ訪  
問談書論ニ涉リ又板下ノトト及ビ一見互ニ旧知ト如キ之ヨリ屢ハ  
往来ス○或日恒助大塚常信所住ス公祺下田中市部右衛門ノ  
用人室田東五郎ヲ伴ヒ君ニ紹介ス東五郎ハ元薩州ノ産ト其ノ  
男谷精一ノ塾ニ在リ知ハ學ヲ恒助ト亦同塾ニテリ親シ前  
ハレ後恒助ノ紹介ニテ東五郎ヲ因中ノ用人室田ノ家ヲ籠シ  
シテ至リ先代田中市部右衛門ノ向都官ノ田舎ノ二子ニテ主計  
稱ス出テ田中ニテ藝ニ浦坂奉行等ノ要職ニ在リト教年ノ當時  
人々ヲ以テ稱ス其ノ實家ニハトキ妾腹ニ一男ヲ擧ル老職同頼  
氏ヲ継テ和三部ト稱ス後大和守ニ任シ和州高徳ニテラ一万石ヲ封シテ存ス○東五  
郎ノ紹介ニテ和三部ト稱ス長子鏡三郎稱ニ手跡同ヲ教授ス  
コトナリ月數回傳年ノ部ニ参テ度セリ



是年辛未三十五歳  
 是歲坐田東五郎ノ媒ハ依リ其主田中ノ領地武州多磨  
 郡原田田ノ農某家ノ次女ヲ養女トシ遣テ該家既ニ其  
 ヲ見快シトセズ幾ナラズテ迹ケ歸リ其狀ヲ告リ坐田之ヲ聞キ全  
 其事ヲ知ラズシテ媒ハ其際瀆ヲ謝マリ

同四年 辛未 三十五歳  
 是歲坐田東五郎ノ媒ハ依リ其主田中ノ領地武州多磨  
 郡原田田ノ農某家ノ次女ヲ養女トシ遣テ該家既ニ其  
 ヲ見快シトセズ幾ナラズテ迹ケ歸リ其狀ヲ告リ坐田之ヲ聞キ全  
 其事ヲ知ラズシテ媒ハ其際瀆ヲ謝マリ  
 同五年 壬子 三十六歳  
 男子ヲ譽ルノ輔四郎ハ稱ス○是歲次女ヲ横綱所ノカ士秀ノ山雷  
 五郎方ノ宮合食セシキ山ハ仙甚後ノ抱テ横綱免許ヲ得當時  
 名アリ曰裏ノ諸國ニ遊ル書翰ノ代書ヲ君ニ依頼シ君ニ亦カ士ノ副  
 系平渡泊ニシテ候氣年アルヲ愛ス秀ノ山ハ君ノ意深ニテ志操アリ  
 其凡テカトテ彼系ノ時ニ或軍器ヲ賜リ家計ヲ輔ル等君ヲ過  
 ハト厚シ志ニ意ニ遊ラ女ヲ托スルニ至レリ○或日妻ハ隣坊ノ浴  
 室ニ至ラントレ漏マ稱儀ヲ遺ニ任中リ歸ルキ時君カヲ按

甚製

此居腹マシトシテハ女ヲ見大ニ驚キ其年ヲ止メ深注シテ曰何等ニ迫リ  
 此聲アルヤト君嘆シテ曰自身宜シシテ一ノ老母ヲモ意ノ如ク奉養  
 スル能ハズニ至テハ毎ニ係累ニ束縛セシレ到底其志ヲ立ハノ期ナカ  
 ハシ今強スル親戚ノ老母ヲ養ムコト今日ノ女キ不自由ヲ感セシメカハ  
 妻ハ其短慮ヲ諫テ曰貴意解ラ理ナレトモ然レバ他人之ヲ日ニテ  
 何ト評ヤシ衆人ノ嘲リヲ免カレハハシ次ニヤ御人ノ折ハヒシ言ハ水抱  
 歸マコト悲ム宜願實マラシ親難ニ托テ持コトナクハハシ  
 ラ其志ヲ立ハズ遠ニカラハレト君大ニ悔惜シ色ヲ有テ曰大ニ誤  
 マテト最早決シテハ如キ聲ヲアルハレト慰諭シカヲ收メ之ニ細糸  
 數丈ヲ纏ヒ池日又ハカナルモハ細糸ヲ解ノ間ニ於テ今日ノ事  
 ヲ信ハレト然レトモ妻ハ其後身邊ヲ離レズ暗ニ之ヲ守ル或日門人  
 伊藤 和藏奉ル故ニ其事ヲ語り若又留守中此聲アルハ悔ムトカカ難  
 故ニ若易ク外出スルヲ許スト和藏之ヲ聞キ然ラハ私ノ奉ルトキニ於テ















いん王の馳せ下りしり○八月天子之命ヲ大山に遣し母ヲ迎へし君の家  
計積ヤ裕カリナリ且家居ヤ手廣ク母ノ意ヲ慮るに区んヲ以テナリ  
日五年戊午四十二歳

姓春名古屋ノ富永家ヲ稱し江戸に歸ん○女子ヲ譽り安下稱之時  
君年四十二四十三ニテ子トシて公前トナシ夜八幡宮門前ニ坐ラ丹  
簡屋茂ハ拾ひて更ニ曰人ヨリ賞受マる言スモトナマ茂ハ紀州  
人某材木商ノ手代ヲ向家長屋ニ住し其性朴實ニテ祥豊ヲ  
好し君ヲ教養し屋ハ専リ祥ヲ法ス

日二年 己未四十三歳

是歳四月尾州参り臣長石川世平左衛門ノ推荐ニ依り男秀三郎  
ヲシテ非常侍用令就役ニ就カシト是ヨリ先<sup>嘉永三年</sup> 日辰日ニシテ君ノ  
門人タル法隆院三郎ノ推荐ニ依り堀田久左衛門親下ニ召抱テ侍令  
至若クテ終ノ當時年少クハ人ヲシテ代書ヤシム偏蘭式御経塚

其甚製

用スル當リ就年ノ初年若クハトスルヲ以テ遂ニ代書ヲ解キは復從  
合ニ至り○兩國村松所ノ醫師依藤氏ニ存来り大同類聚方ニ板  
下ヲ補鳴○ニテ諸フは書ニ海陸風ヲ以テ書スルモノ君ノ最ニ得意  
ハスル所進ニ諸ス或曰民ニ介ノ情来り其去来ヤシクテ諸フ故ヲ給フ言  
ニ符ヤ金ニ取テ行ヲ書シ照シトス其情痛癢玉ヲ地ニ投シ爆ヤセテ  
葉君心ヲ鍊メテ揮長スル際其音ヲ聞大ニ怒リ遂ニテ歸ス民ニ介シテ  
聞ナシノ怒年ヲ合ニ来りカヲ度例ニ據ハ君ヲ語ル君亦カヲ引高  
之ニ應テ曰彼レ不禮ヲ為スルヲ以テ怒リシニ汝其禮ヲ謝スルヤス  
却テ金ニ取セシトスルカ放ラ若キヤ辭セサナリ聲ノ色役ニ屬シテテ常  
ハカラス而後口ニ後ヲ曰余ニ托スル所書ニ斯道ヲ益セシリ言ハ舟ヲカ  
ハシテ其事成テモテ一朝ノ怒リノ乘ルニ身ヲ果スニ至テハ世人ニテ  
何リカ評セシトス言ハスニアラスヤ民ニ介其理ニ服シ意ヲ和得ル甚  
深ヲ謝シテ歸ハ時妻汝存石ノ如何成行カニカト年ニ行ヲ捨リ















二二二二二二二二二

ノ字の教は、長短ノ石極ク感、長脚ヲ差リ扱ヒ、然ルニ傷者、  
 ナリ少敷ク全クハ済ム、幸福ヲ云フこと、余其用意ノ周到ナリ、  
 致謝ス。○河津和之部、其ノ山陰修築ノ事ト建言セシム、希フ所共  
 得ル先ニ高橋ヲ橋主ノ田越前守忠忠、年僅カ、十六七、謀議、和之  
 部、其ノ口是ニ至リ、其姓ヲ戸田氏、後ニ山陰奉行トナリ、和之部  
 陸防ニ就メ、大和守、任ス、是歲、大和守、東下リ、河津守、都守、三浦士五  
 十人、年堂ヲ有シ、之ヲ東海道ニ要撃セシト謀ル、君之ヲ聞知シ、弟之治ヲ  
 シテ、密ニ平野ト上ル、其本ノ密告ニ難ク、河津守、○門人、安川、因  
 作、和之部、長女、嫁ス、是年、男ヲ生リ、柱三、和之部、和之部、  
 ス、之ヲ強メ、君初孫ヲ得テ、悦ビ、○河津守、不、幸、ヲ見、大ニ、  
 悔、家、ノ、シ、ラ、年、ヲ、和、之、部、タリ、斯、祝、波、キ、マ、ラ、サ、リ、シ、ト、嘆、キ、  
 國、勢、ノ、傾、キ、手、向、ケ、ラ、ン、和之部、ト、人、ニ、モ、カ、ク、モ、カ、ク、 日向院、美、大、  
 同三年、丁卯、五十二歲

八世製

君南ヲ大橋順藏、親、其、著、劔、子、毒、ニ、再、来、シ、リ、是、歲、カ、  
 十、五、毒、ニ、順、藏、通、孤、義、ニ、伴、テ、入、門、セ、シ、ム、又、勃、微、但、テ、部、士、  
 同、ノ、男、友、五、部、ヲ、好、同、但、者、三、名、其、三、十、年、名、ノ、入、門、アリ、  
 同四年、戊辰、五十二歲  
 五年十月、徳川、喜、將、軍、職、ヲ、辭、シ、復、テ、政、權、ヲ、返、上、ス、ヨ、學、ヲ、大、橋、  
 リ、今年、二月、兵、ヲ、率、テ、月、上、京、セ、シ、伏、見、島、ヲ、移、テ、官、軍、ニ、要、  
 利、ア、ラ、ス、シ、テ、和、之、部、ヲ、大、橋、保、三、日、同、年、親、征、大、橋、保、三、官、軍、先  
 鋒、隊、ト、シ、テ、和、之、部、ヲ、諸、藩、江、戶、屋、台、ヲ、封、掛、シ、各、其、國、ニ、歸、ル、女、  
 藩、主、先、後、ノ、言、直、恒、院、ニ、亦、二、月、ヲ、以、テ、名、古、屋、歸、ル、秀、三、部、  
 御、之、カ、リ、名、古、屋、ニ、到、ル、○君、家、族、ヲ、率、テ、三、日、ニ、テ、以、テ、同、作、ノ、  
 下、經、國、為、御、部、三、階、系、新、田、出、川、新、作、ヲ、和、之、部、遊、リ、江、戶、  
 存、テ、人、ノ、室、留、存、セ、シ、ム、月、晦、日、君、之、妻、ヲ、携、ヒ、江、戶、  
 初、使、江、戶、城、入、ル、十、七、日、君、ハ、小、室、之、解、ニ、和、之、部、  
 御、之、カ、リ、名、古、屋、ニ、到、ル、○君、家、族、ヲ、率、テ、三、日、ニ、テ、以、テ、同、作、ノ、  
 下、經、國、為、御、部、三、階、系、新、田、出、川、新、作、ヲ、和、之、部、遊、リ、江、戶、  
 存、テ、人、ノ、室、留、存、セ、シ、ム、月、晦、日、君、之、妻、ヲ、携、ヒ、江、戶、  
 初、使、江、戶、城、入、ル、十、七、日、君、ハ、小、室、之、解、ニ、和、之、部、



下経ノ跡因ニ遊ニニテ之に戸ノ帰ハ○六月廿日戸田大和守其臣西村  
俊三郎書ヲ持テ君ヲ京都ニホク當時朝廷諸藩士ヲ徴シ空歎  
ニ就カシ故君ヲ推尊スルニスルニアリ是ヨリ先舟三書ヲ以テ招カシカ固  
辭ヤシ其初ニテカハシラ名ニシテ思ムハ決シ侍者ヤリ○七月廿日戸田  
俊ノ臣山田基在来ハ、就テ経州府ノ印鑑ヲ請ヒテ奉下刻ハ  
戸ヲ若ク健ニシテ之ヲ以テ時石橋ノ家東ノ者齊名下屋ニ歸トテ  
聞同行旅中ノ事ヲ悉ク且月餘下経、安川定ミテ分岐女子ヲ皆  
ク信ハ稱之○君當時眼疾ヲ患フ途次横濱ニ至リ醫師は多  
ク訪フ不在ナリカハ門人、請ヒ眼薬一壺ヲホシ剛テ西海屋久ニ評方  
岸田銀次ヲ訪ヒた致シ眼薬ヲホム君ハ戸ノ若ク岸田来リ  
君訪ハ友ハ成ノ横濱ニ在リテ眼薬ヲ製成シ取寄スルカユヘナリ  
又ハ多シ遊前膳山小笠原俊ノ臣ニシテ材横助、親戚野原ヲ  
聞ク所ナリト云ハ當時横濱、武士ハ出入スルハ檢テテ履キナリ君ハ総督府

其製

ノ印鑑ヲ示シ順次書キ送リ五所関門ヲ過キ漸ク其間ヲ弁シテ  
去テ程ヲ石ノ印ニ○二十三日程ヲ石ヲ至テ横濱ニ到リ行先キ横濱同  
四女以車水馬入川往来ヲ止シ此ニ歸降跡、常質ノ者多ク君之ヲ聞  
且前日横濱、到リテ府ニシテ病疾ノ意外ニ痛著シ感スルヲ家ニ  
キ驛ニ泊ラズ下ハ横濱宿從、西上ニテ從ヒ横山ハ三印以テ横濱  
遊返ニ故ノ古郷ノ如クシテ何テヲ此ハ三印ハ元名古屋ノ人其親和ニ  
即ハ保劍術ノ人ナリ○二十三日島驛ニ到リ此部官ニ陽ニ去入録登  
ニ控宿ニ宿退久ハ使去リ難キ客アリテ轉高ヲ乞ハ不快ナラ玉テ他處  
泊メ夕飯ヲ喰ヒ同行ノ者齊名、後ハ際ナカ固程入リ、佃着ク身  
ハ穿鑿スルニ遊ニ出ス方、悟ラズ遊ニ歸リ夜半過ルハ使宿ニ就ク同  
ナク戸外火出アト叫フ者アリ君之ヲ聞ク直ニ起テ身紅袴ヲ着キ坐見  
ニ五三斬先ノ白例ヨリ坐シテ、火ハ燃テテ陽家ニ迫リ然レハ幸ニテ  
君ハ仍シ家ニ火ヲ免ルヲ保却テ先キ爾ハテシ福屋ニ類焼セリ



○七頃道中極テ混雜早打ノ往テ通ニ等ノ為ノ人馬不任旅行甚  
 シ不便ナリ君ハカテ衆人ヲお越シ急キヤルニ廿九掛川ヲ至ニ阪ヨリ人  
 馬ノ雜立テ滞リテキテ今切ノ宿ヲ選ビテ宿シテハ道ヲ急キヤル  
 フニテ舞臺ニ到リニ今辰ノ船ヲ着ヤシトル折ナリ直ニ乘船退キノ風  
 ナレハ忽チ岩井ノ着ス岸上ノ人アリ君ヲ待テテ、此ノ陸上ノ其ノ内  
 ノ案内者何トシテ、因旋セリ引カレ、カ儘ニ船ヲ降ノ飯田武平ノ家  
 ニ至ル主人出テ、君ノ名ヲ呼ビ、奥ノ一間ニ宿シ入ル君未ク而、識テキテ其  
 語ヲ聞ク主人是日前自撰撰侍從者家、ゆゑ其臣桂山ニ上テ、西氏ヨリ  
 先生ノ通函ヲ示シ、聞キ是亦一泊ヲ頼ニシテ、乃チト世當家ノ久シク、戸田  
 家ノ出入シテ主人武平ノ文事ニ志、厚ク大極順藏等、交ワレテ、夜  
 深クハ、テ語リ、陸ヲ需ニテ、ルニヨリ、教書ヲ揮、長シ、此ノ時、偶ニ、存、掛テ  
 ハ、言テ、武州、筆水、墨山水、ノ散大ニ、テ、賞シ、ヨリ、人、遠シ、テ、君、贈ル  
 君大ニ悦ビ、爾テ、歳ニ、行ル、水、戸、深、到、ル、書、幅、ト、テ、授、セ、テ、ト、功、之

其製

主人ノ好シテ、勅王ノ士ノ筆跡ヲ集メテ、聞ク、由ル、主人モ亦大ニ之ヲ  
 悦ク、○八月初、奉命、在、井、ノ、池、ノ、邊、有、雨、致、水、深、雨、多、シ、赤松  
 ニ、宿リ、二、日、藤、川、ノ、邊、崎、ヨリ、一、里、程、テ、前、ニ、テ、好、水、雨、ニ、テ、知、川、邊  
 船、止、ル、ハ、聞ク、因、山、崎、ノ、池、ニ、テ、再、宿、シ、テ、於、テ、清、宿、留、シ、テ、下、刻、渡、道  
 通、ス、ト、聞キ、取、急、キ、出、去、矢、刻、川、ヲ、越、シ、地、經、新、到、ル、崎、又、夫、白、川  
 出水ノ方ノ往東ナリ、難シクテ、舟、以、テ、宿、ル、ハ、君、ハ、行、先、キ、テ、名、ニ、テ、此、邊、若  
 シ、幸、也、ニ、危、ニ、往、東、ノ、東、ノ、方、ヨリ、行、ク、ニ、其、水、ノ、深、キ、所、ハ、流、ヲ、渡、ス、ニ、至  
 レ、難、多、ハ、難、カ、ク、越、シ、ハ、幸、也、出、テ、次、ニ、早、荒、崎、ノ、乃、ハ、テ、後、キ、ト、云、フ  
 乃、チ、金、吾、者、行、ク、困、難、ナ、リ、又、水、ノ、深、キ、所、ヲ、過、キ、テ、幸、ニ、テ、宿、留、シ、道  
 ニ、是、ヨリ、只、吾、道、ヲ、急、キ、名、吾、屋、ノ、入、幸、ト、立、テ、日、東、屋、屋、法、助、カ、宿、ル  
 ナ、味、ハ、時、而、ノ、中、刻、ナ、リ、テ、男、秀、三、郎、ハ、宿、留、シ、到、リ、テ、君、ヲ、呼、テ、時、過、リ  
 レ、ト、云、来、リ、給、ク、ニ、傳、馬、前、ニ、就、テ、聞、ク、テ、便、テ、沿、ス、或、ハ、行、速、ニ、テ、カ、ハ、思、  
 帰、路、方、板、南、三、郎、ノ、家、ヲ、行、ヨ、キ、ト、云、来、ラ、ス、ト、止、マ、テ、宿、留、シ、其、時







戊五十二年、年々入レシトテ君、日加チ好ソ所ノ教、不ク出テシキハ以テ  
大和守ノ公事頗ル多シヲ知早ク去江東、入ラセテ退ノ食セシトモ  
君ノ間チ備後守、侍ニシテ其ノ上京ヲ大ニ悦ビシトモ衣履、能  
クハストモ至クモ教、不ク名カラ見ハ申シ、歸シタリハ一文堂則テ守カ  
ニ守守短刀ヲ五定ノ日、作備後守保良見守刀等ナリ健シク袴地  
ヲ結リテ君ノ下結見若シトテ新ニキク給ハテ夜ニ申テ、藤原守  
ノワラシ其家、俗々而シ其後公養科ハ皆度ヨリ辨セテシタリ大和守ハ  
主上ニシテ御連行ニ備先帝、命ヲ奉テ用意甚ク頗ル信賴アリカ  
君ノ其前、公養ニシテ大ニ悦ビシタリ○十九日君ニ戸田家ノ家持、各抱  
ハシシ五十石ヲ給フテ名ニ江東ニ入リテ十日住ル男健シク十日性、名抱  
ハシハ石、二人相持テ給リ侍子、是後學向年研、師相手ナキヤシ  
キオ大和守君、前面出侍候、侍移マシ時度君、シテ、小侍ノ  
身ニシテ君、給ヒシテ侍候、歳々毒ナリ然レハ以時院、史ニ臣ノ君、選

世襲

セラハ、内意アリ其事、由テ同常ノ若年守タリシ秋月某 此時稱  
月本 常テ君ノ書ヲ見シコトヲ思ヒ、其過恒々ハノテ相役、君ヲ推戴  
セシトテ約セリトモ君其恩遇ヲ深ク感戴シテ○次日備後守君ノ御下  
ニ奉リ書給ヒテ相ヲ携、奉<sup>レ</sup>内、大悦ビ、退ラシメシ。侍候ヲ甚クシ  
後任ラシマズ公養人、見ヤシク嘆稱セロハシモ亦メ略シテ、沿ニトテ  
怨中ニ故、柳菰（抄）シテ之ヲ分シテ其本ヲ行ニシモ悉ク切城大徳（抄）  
キ、歸セリト度之ヲ遺憾トシ他ノ又阿養重セルコトヲ語ルハ君シテ聞テ  
大ニ悦ビシト投（抄）テマカテ公家ノ君ノ内ノ心ヲ切心チ二十年入アリ○二十  
ハ君上下ノ用意ヲキヨクテ、極山登五郎 柳菰  
人シラニシテ 更に上下取帳子ヲ借リ、戸田邸ニ行キテ伊家、初テ手紙  
教授シ、二テ其上下ノ相帳、手紙、初ハ大和守、年上初、昔  
シ、に、向ラシハ、侍子行馬、通シ、御見多ク、乃チ、君、早ク、衣履、  
歸リ、極山、上下、下、返シ、歸リ、黒石、往リ、伊家、手紙、甚ク、上、キ、在リ



臣等君ノ書ヲ學ビテナリ親シク侍リ高ニ歸ル○九月朔日君其弟ノ信  
 家、移御之甚ク難澁トス一時、任官トス戸田宗○因縁テ僕一人ヲ百抱  
 破車下路ノ車ヲ有カシ○嘗夜山田靜馬山田を仰ト云ハ此等事ある事ナキ  
 松屋氏有テ君ハ人ナリ  
 身ハ赤照平由大學ト云人ニ所屬、上車トト道中ニテ或リ乗馬トニ乗  
 馳ノ曲シハ馬ト直スニテ今もニ馬トニ之ハ、吾ハハハ其心ニテ乗ハハハハ  
 其代ニホ振置キニ程ナリ夜馬トカカリカカリ乃身少ク順テ指テ傷ヲ  
 傷トシテ夜マニ乗キ法マナク見テカカリ怒リ其白、お侍道、お言ヤトトモ  
 三ノ先ノ日ニ、嗚、ノ聲ハ降人ニ誤ラ驚ク所ス怒リ肩先、お侍ノカ付  
 下ニ過、逃去シテハ又或木所所内過テ道ヲ行セ、白母ヲ以テお侍トシ  
 アリケレ、指合マテお侍トシ、お侍ノ心ヲ逃去シテハ、侍トシ、君其弟ノ信  
 家トシテ行キテお侍ノ澤ノ之ヲ戒、歸ルリ○六日松下直衛君リハ、侍トシ、  
 三ノ先ノ日  
 身初侍ノ侍、書ヲ字ト直、筆ヲ執、取筆ヲ書、此ヲ夕初若松宗  
 一秀ニ御リ、書、女ヲ嫁ル、まハ○七ノ君方友筆ノ書、上ノ侍ト相和シ、  
 甚製

ノ命ヲ受ク○八日戸田即チ行キ平路ヲ教授、正午退、免領、侍所ニリ  
 右状奉、留守居後、赤田原、道、附添、直、出頭、柳原前光、御士  
 行政官吏官、武神、解令ヲ受ク、皆戸田多ク、上下、系小袖ヲ結ハ、男  
 健ニテ、海、田、シ、結、九日生、任、シ、休、眼、ト、故、道、軒、史、官、美  
 田、又、誠、ヲ、富、小、路、家、初、シ、勤、任、ノ、事、等、ノ、間、歸、宿、ス○十日、初、出  
 仕、勤、務、ノ、服、ス○十日、君、江戸、在、リ、眼、ヲ、病、シ、系、系、防、シ、リ  
 重キヲ加、系、系、ヲ、執、筆、シ、不、便、ヲ、感、シ、加、ル、所、辭、シ、甚、ク、故、史、官、  
 日下部三郎、近、書、ヲ、送、リ、其、日、引、給、籠、リ、三、本、木、醫、師、治、直、藏、ニ  
 侍、候、ヲ、托、シ、日、々、之、通、リ、十、四、日、幸、通、リ、押、小、路、下、ハ、所、醫、師、服、甲、ト  
 介、勤、業、師、東、洞、院、東、入、所、眼科、越、智、高、松、二、氏、ニ、托、シ、侍、候、ヲ、治、  
 是、ノ、先、君、眼、病、勝、リ、侍、候、ト、大、和、守、存、意、ニ、對、先、口、其、職、ヲ  
 拜、シ、カ、侍、候、病、能、事、堪、ハ、ト、當時、一般、官、吏、ノ、風、習、ニ、意、協、ハ  
 サ、レ、見、且、官、在、ハ、戸、田、宗、ノ、報、ス、道、ニ、テ、ハ、思、テ、書、ヲ、大、和、守、上、リ











拒松狗次其の程々後より漸くミテ午迄ハハ後迄ニ上リ以テ君が途ヲ認レコト  
来ハテ依藤徳治鬼頭和喜ニ長谷川整五郎の鬼頭三平ニ即榜舟至  
蔵若林梅仙山岩隠ニ宗一高榜官ニ即答ハ音ニ即信京和尚著ナリ  
経巻ニ到リ固ク、家ヲ訪フコト本久手押ノ後家ナリ久ノ雨来リたり夫  
母ハ僕、出テ迎、ハ者ヲ告ニ怨符ニ且音日、汝ハ時ヲ移ス武家ノ君者  
各古巻ニ存シ昔ニ畫シハエ伏爪ノ信玄道代ニ雄將ノ存ルニ據ルハ係  
ニ慎シ屏風ニ張リ在リ以テ主人君一ハヲ請ヒシカ行先キヲ去テテ辭シ去  
鳴海駒、信々秀三郎ハ頼田出ルニミテ別入○廿六田、驛ガ者  
臣ヨリ官軍ノ出陣ニミテ逢フ驛政根難ヲ極クそ在井ノテ頼田武兵衛ヲ  
○晝日約束ノ武州ノ畫幅ヲ贈ラレ海五ノ幅ニ歸車ノ上達ニ送ラレ  
コトヲ約シ信々、舞坂ニ泊ス○廿七府中、到リ徳川家、頼田殿部  
某、臣横山啓ニヲ行ヒシ信々、居ニヤトテ達ス○廿八府中、立去  
年、信々、信々、心地勝レタリトテ結後ス○廿九信津ヲ過クハ臣有ニテ

八甚製

此年ハ文々十三人

ラ横山啓ニヲ守子君ハ宿外ノ某家ニ憩テ待ト暫クシテ信々ニテ来リ談  
話數刻ニテ分袂ニ島驛ニ到リ信々○廿九吹夜ヨリ風雨烈シテ明クハ信々  
リ雨止辰ノ中刻、至テ信々ハ人臣揃ニ三島驛ノ燈ノ山中迄ヨリ雪アリ  
進ニ進テ深ク其甚キ初ハ四五尺ニ達シテ健條ノ連テモ屢ニ轉ヒシ君  
輿中、在リテ心安カラス疎ノ間門ノ邊ニ信々ヨリ相ハリ雪起リ雪降ル来  
歩行極ク難シク信々、榎ノ木、到リ信々、雪淺ク日暮ルハ、信々、  
烟ニ着キ若荷屋ニ泊ル○廿廿空好ク晴シ道ニ披取リ初夜、信々、  
翌廿廿夕暮ル時信々、家ニ歸リ至者、一日出迎、相見テ其意ナキヲ  
祝スヨリ信々、信々、三ノ學徒トシテ家ニ表フ信々、信々、  
信々、信々、

明治二年 己丑 廿三歳

二月十九日養子三郎公儀前筆生ニ合セカハ○四月廿二日女菊瀧和直ノ嫁  
ス○六月五日名古屋藩、重臣小笠原某、信々、信々、  
燒敷箇ヲ一齋ノ君ニ古事記、信々、信々、  
信々、信々、







大正四年三月廿七日

○所居之妹若子女出行之日居之妹若子女歸之病亦故ナリ○  
同五年三月廿三日

三日 日君病之甚矣漸次快多是日夕時 府上視ヲナシ 病氣亦見  
ヲ孝シシ 亦春氣ヲ始メ ○四月十三日 初テ外出清年親音ニ希諾ス ○十日  
整則ヲ文部方ニ出ス 長兄和整同業者ナリ 整ヲ ○五月十日 和學同業ノ友アリ  
○君頗ル刀劔ヲ喜ミ 山年家計 祐ナリハテ 數ナク購ヒ 日々之ヲ弄シテ 無  
上快樂トシテ 衣服ノ妙ハ 喜ミ 願ス ○六月十日 秀三郎東京生仕  
所 派ノ命ヲ奉ケニテ 出立ス 是ヲ先中 橋本幸吉 島田幸次 訪君ノ  
病ヲ見秀三郎ヲシテ 連テ 歸車ニシテ 同ノ 君之ニ 奉曰云事ヲ以テ  
外ニ在リ 私事ヲ以テ 之ヲ 扱クヘキニ アラスト 固テ 辭ス 故ニ 其事 止ム 今戶  
藉 田重 畢リ 其 海舟 完成リ 以テ 携テ 上京 大藏方ニ 納メ 暫ク 出立ル  
右 節ニシトテ 亦ヲ 奉クニ 至レリ ○廿六日 君病ヲ以テ 府ニ 出立ル 七月  
七日 君病 快 疾 甚ニ 接テ 語ル 皆 其 平 憶ノ 遠キ ヲ ラカシム 故ニ 復ナリ ○

八世製

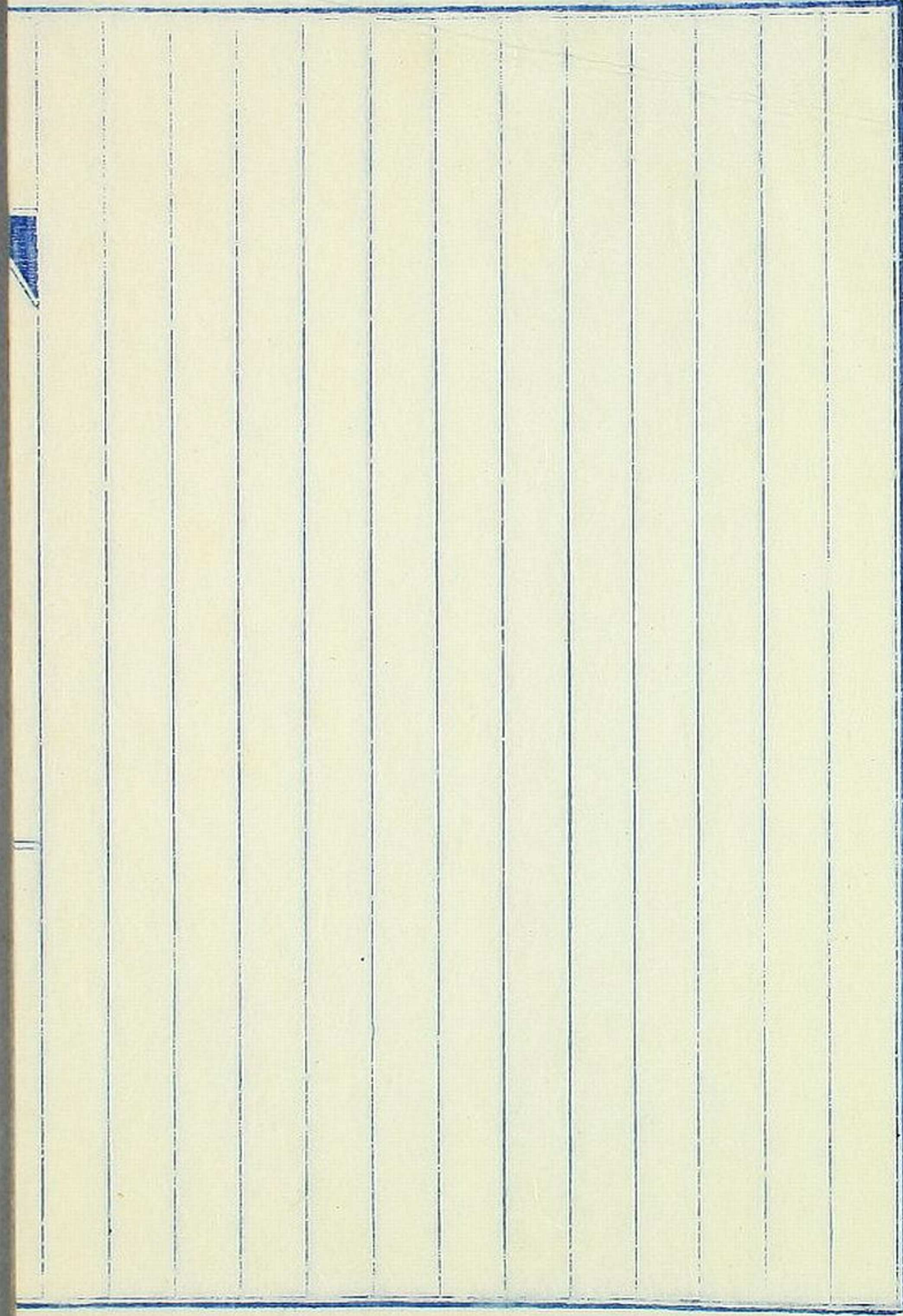
大正四年三月廿七日  
大正四年三月廿七日  
大正四年三月廿七日

或日 要津寺瑞林和尚来リ 君ノ 病ヲ 訪フ 君大 悦ビ 快談 敷刻ニ  
時 君 永訣ヲ 告ル 和尚 慰 後ニテ 曰 不日 全快スヘシト 君 肯ヤス 和尚 曰 早  
テ 去 病ヲ 以テ 永訣トセテ 隔 終ニ 至ル 乃チ 一旦 一畫ナリト 書キテ 連  
カレテ 曰 君之ヲ 謀ル 次日 カノヲ 握リ 麻 然ニ 二大 字ヲ 書シ 和尚  
與ニ 所トシ 又 居 紙 奉 折テ 以テ 自ラ 其 語 辨リ 書ス 以テ 時 傍ニ 侍  
レ 妻 氣 衰 三 卯ニ 見テ 大ニ 驚キ 且 悲シ 君 其 書ヲ 見テ 曰 此 筆 勢ヲ  
存マキト 知 却テ 示ラセムト 破ニ 決テ 然ラズ 余 數ヲ 數日ヲ 出カハシト 連日ハ  
快ク 豫ク 二 香 吹ク 後 作キ 坏シ 且 佳 筆ヲ 教リ 辭 世ニ 歎ク 一 有テ 書キ 又  
遺 言 數 項ヲ 書ス ○ 廿六日 君云フ 今 夕 必ス 逝クヘシト 曰 浮 前ニ 苦 曰  
アリ 君 信 存スルニ 出テ 告テ 君 子 矣 却 迫リ 連テ 願 辭ヲ 答フ 存スヘシト 皆 其 悲  
心 也 又 復 復テ 君 早クニ 逝クニ 望ミ 漸ク 逝クニ 望ミ 漸ク 逝クニ 望ミ 漸ク 逝クニ 望ミ  
使テ 以テ 殿 無 若 等ニ 告リ 殿 亦 尊 德 若 武 部 等 並ニ 奉 相 傳ニ 向テ 天 師  
仙 輔 吉 川 金 兵 衛 伊 澤 德 彦 等 亦 奉 拜 禮 遂ニ 國 鏡ニ 移ル

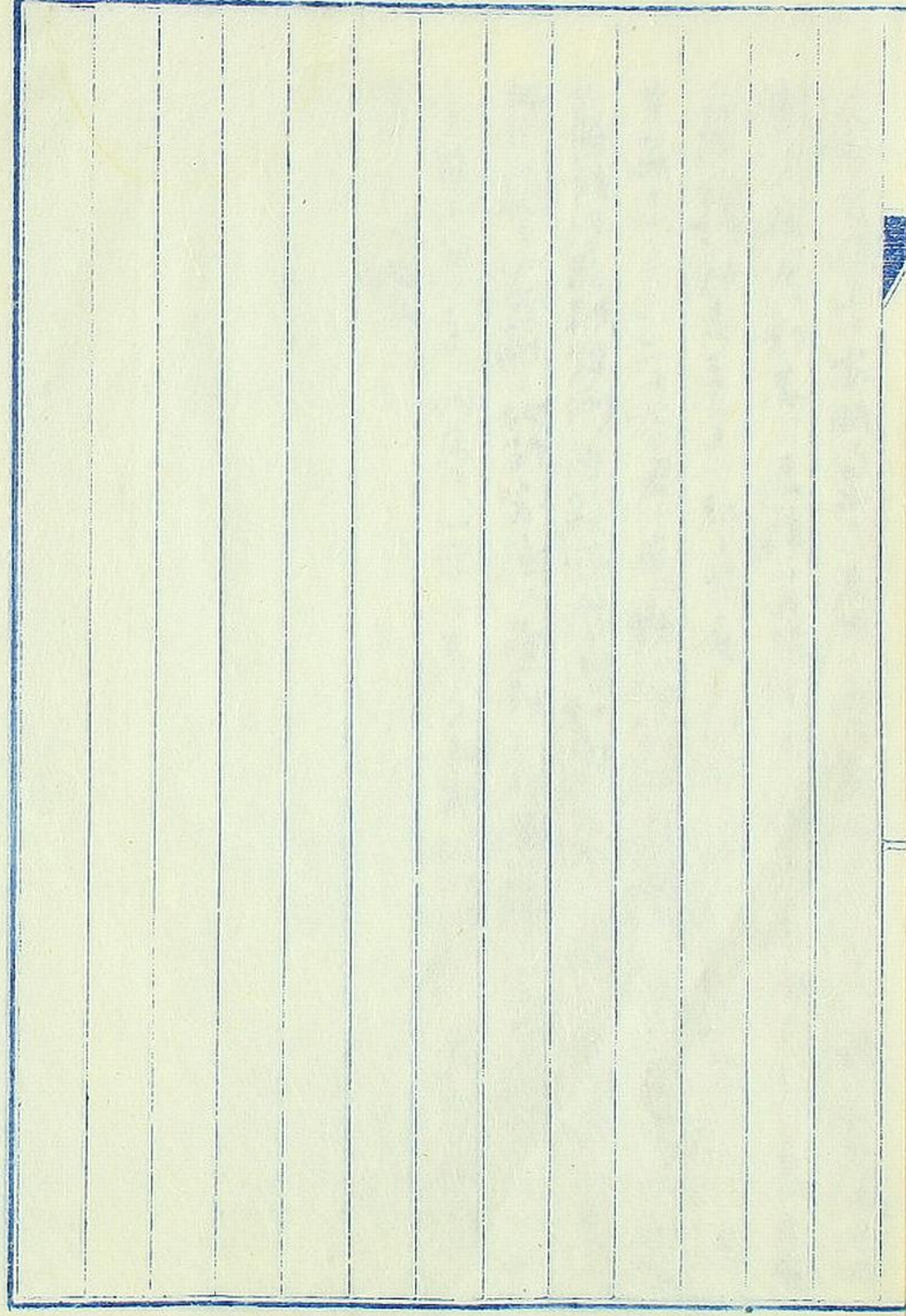






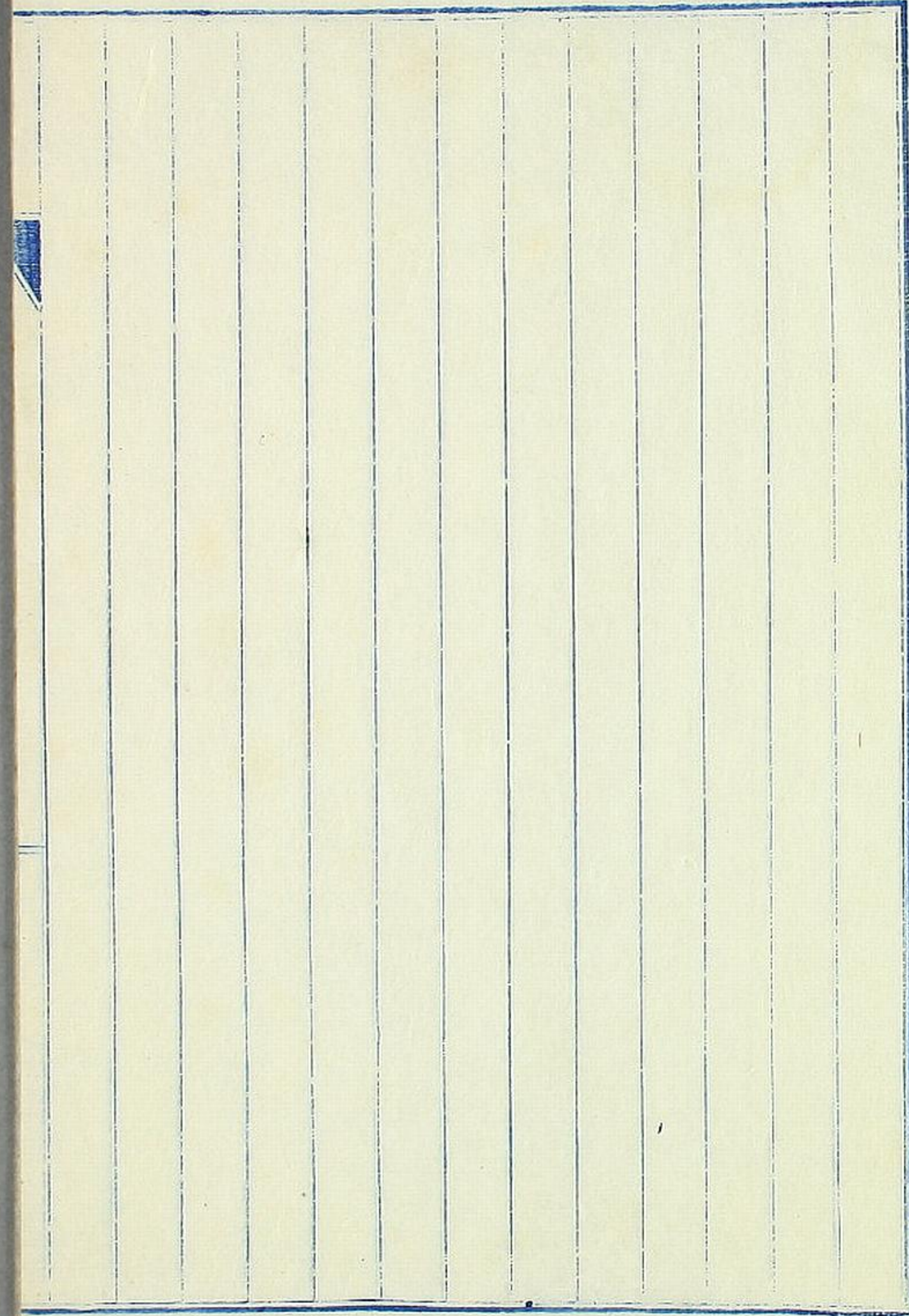


八  
世  
製



八  
世  
製





全書



全書



全  
製



